

学校法人制
に組織替え

七 学校法人武田学園設立

本校は、発足から二十六年間までは私立学校制度のもとで運営してきた。昭和二十六年に学校法人制度が施行されたのであるが、本校はその法人制組織にするために、準備期間を一年とって、設置



広島県可部女子専門学校長時代 1953年

基準に沿う準備を行った。校地の拡充、校舎増築（調理室その他）、図書・校具等の調達、役員の設定等の万全を期して、組織変更の申請を二十七年四月に県へ提出した。

さつそく六月には県の係官信田主事が現地調査に来校され、調査の結果、施設も設備もすべて設置基準に達していることを見届けて帰られた。間もなく七月初めには県の方から法人の認可が下りることになったが、日付を何日にしようか、希望の日があれば言えと親切なお言葉が

あった。そこで創立記念日が四月十五日なので、その創立記念日にあやかり、七月十五日に法人認可証が届いた。当時十余名の教員が手を取りあつて喜び、しっかりとやろうと誓いあつたのである。

当時の役員は、理事長・武田ミキ、理事・神原秀夫、岡本半次郎、垣内フミ子、奈良井浩、大佐正之の六名、監事は吉永時義、神原重吉の二名である。他に評議員十名の組織となっている。

作法を正科に 二十七年末、賀茂郡高屋町の教育長、樋口先生（元県庁におられたところからの知り合い）からの取り入れる 依頼に、高屋町の中学校に勤めている森本花子先生を採用してほしいということがあつた。そこ

で森本先生は何が専門かと聞いたたら、家庭科なのだが、茶華道が得意だということであつた。家庭科の方は、和・洋

ともベテランが揃っているし、茶華道の先生は非常勤がおられるので、今のところ欠員はないがとしばらく思案していたところへ、再度樋口先生からお言葉があった。そこで、謙虚にして優雅な女性の育成を掲げている我が校のこの教育方針の浸透を図る上には、作法を正科として、専任の教師に来てもらって、全校生徒の指導に当たってもらうことも良いことだと考え、作法を正科とすることに決定したのである。

だが、森本先生という人が来られたので作法科が正科になったと解釈する人もあろうが、それはタイミングの問題であって、元々からそのことは私の頭の中にあっただ。

そこで、森本先生を迎えるに当たって、作法の先生に舎監を兼務してもらえば、舎生の生活指導に最適であるというので、茶華道の非常勤講師には辞めてもらって、森本先生を舎監を兼ねた専任教員として迎えたのである。二十八年四月一日に赴任され、本校校舎内に移ってもらったが、半年くらいで茶華道の教えを他から乞う者があるので、それらの指導を夜や日曜日にしたいたからの理由で、舎監兼務は断られ、学校を出られて広島市から通勤されるようになった。

その舎監の後任に、本校卒業生の小原恵美子氏にお願いして、舎監の任務に就いてもらった。母校愛の人一倍強い小原さんは、それはそれは実によくやって下さった。率先垂範型で誠実一筋に生きる人で、本校の教育方針にびったりの人であり、またその指導力のある良い舎監であった。

校舎を可部町に移す

二十八年四月頃から、可部町の町会議員、神田五郎氏他二、三名の方々が来校になり、可部町に帰ってほしいといわれた。それには「可部町の元中原小学校を現在可部中学校が使用しているのだが、来春新校舎が完成するので、そこが空くことになる。それで、その校舎を求めて可部に帰ってほしい。」との要望であった。

もともと、郷土の文化向上の一翼を担いたいという意志から創設した学校なので、それには安佐郡の中心地の可部

町で発足しなかったのだが、当時土地が求められず仕方なく古市町で建物を求めた。開校三カ月後、この地に移ってきたのだから、“可部の地に”とのお言葉には、飛んで行きたい気持であった。

しかし何分にも病床にある身のこととて、その校舎をすぐ見に行くことも出来ず、且つまた、創立の精神が“最少の学資で最大の教育効果を挙げ、役に立つ有用な人材の育成”を掲げている我が校なので、したがって授業料も低額にしていた。そして月々の経常費も不足するので、兄から毎月私の養生金として送ってきていたものを学校経営につき込んでいた有様であった。

当然、校地校舎を購入する余裕はなかったため、その資金についても考慮せねばならなかった。そこで「よく考えたり、相談しておきましょう。」と御返答申し上げておいたところ、また引き続き、その話で、今度は議員の替わったメンバーの人たちが四人お出で下さるなどして、可部町に帰ることをしきりにお奨め下さった。そこで病床から起き上がり腰をかかえて、垣内・森本・下垣内の三教諭と可部の地に参り、位置・校地・校舎を見て、これなら位置もよいし広さも現在とすればまずまず良いだろうということで帰ってきた。さつそく、長男や里の兄に相談して求めることに決心したのである。

それから間もなく、また可部町から来校下さって、価格の折衝に入ったのである。やはり、当時の相場よりやや高かったのであるが、買うことを承諾したのである。

それから資金の調達のため、仰臥の身ながらも手紙や電話で一生涯命に努力し、まず見通しのついたころ、また可部町から代表者がお出になって、「会議の結果、先般の価格では安すぎる、もっと値よく買ってもらわねばということになりました。」というお言葉に、私はちよつと異様な感に打たれたのであった。それというのは、私の方から決めた価格でなく、可部町から打ち出された価格をそのまま承諾したにもかかわらず、「町議会の結果云々とは、聞こ

えぬ話ですねー。」と申ししたが、人生で最も思慮分別の良い年齢層の方々で、しかも町政を司る重責におられる人たちが、三人とも並んで座つてのお言葉である。年取つた病臥のか弱い女性一人との対談なので、その場の空気は筆舌には表わされぬほど異様なものであつた。

しかし、私は勇気を奮つてこそぞと一息ついて、「それでは、幾らならよろしいんですか。」と申したら、「土地一坪壹千貳百円だつたが、壹千五百円だ。」というこゝでしたので、私はしばらく口を閉じて黙つていたのだが、「よろしゅうございます。それでいただきますましよう。」と申したら、お三人があつけに取られたような顔をして、お互いが顔を見合わせておられた。それではよろしくといつて立ち去られた。

後から聞いたことなのだが、私の方へ買つてほしいと来られた後、水素会社を誘致したらということになつて、武田に断る理由として、「値段を高くすれば、武田はついて来ぬであろうから。」という作戦をめぐらされての事であつたとのこと。その三人が私方より帰る道すがら、「とてもようついで来ぬと思つたが、意外であつたのー。」と会話したとのことであつた由、これも後から耳に入つたことだ。

その直後、私は仰臥のまま、当時の町会議長中山（齒科医）さんに宛てて信書を出した。その内容は、「このたび、貴町よりお奨めいただいた校地・校舎購入方の件は、本校を可部町に誘致下さる意味と考えておりましたが、さうでなく可部町所有の土地建物の処分のためのお言葉であつて、その後、本校よりも可部町にとって有利な者が現れたので、その方に寝返りを打とうとされたというのを洩れ承りましたが、大可部町がこのような操をひるがえすようなことを考えられたことに、いささか不快な感を抱いております。町政の中核であらせられる議長殿におかれましては、可部町の名譽にかけても、今後このようなことのないようお願い申し上げます。」

その後、可部町議会の席で「武田さんから痛い手紙をもらったでよー。」と話されたということも聞いたのである。

別に痛いのではなく、私の真実を申し上げたまでである。

とにかく、こうした波乱曲折の中、とうとう可部町のその土地建物の売買契約の調印を、二十八年八月二十日に可部町役場で行った。校地は町有のもののほか、個人のものもあった。辻、土井、中川、その他一、二の方のもあったが、そのとき一緒に調印し手付金も支払ったのである。その校舎は、二十九年二月末と五月末の二回にわたって明け渡しても

らったのであるが、代金の手付けの残り分は、二十八年十二月末に全部支払った。そして一月から五月までは、学園所有の土地・建物を可部町へ無償で貸与してあげていたのである。世の多くの例は、私学などの場合は、市町村が便利をはかるということは聞くが、私は反対のことをしてきたのである。

二月に一部明け渡してもらったので、四月の新年度の発足は可部町のその校舎でしたいと思ったので、さっそく、移転の準備をして三月上旬に可部町に移ってきたのである。校舎は平屋二棟の二七〇坪、二階建一八〇坪であった。平屋は明治初年の建物で、まったく老朽校舎であった。したがって汚れて古びていたが、「無から有に」「狭いところを広く」「きたないところをきれいに」という主義で何事もやってきていたので、この老朽校舎に手入れをして磨きをかけたら、見違えるほどきれいになった。町の人々がお寺の前を通るような気がするなんておっしゃっていたそうであるが、仏様の境内と表現されたことは、清らかなということ、それほど美しく掃き清められているという意味であろうと思う。



中原校舎 開校から6年ぶりに可部の地に戻る 1954年

校医について

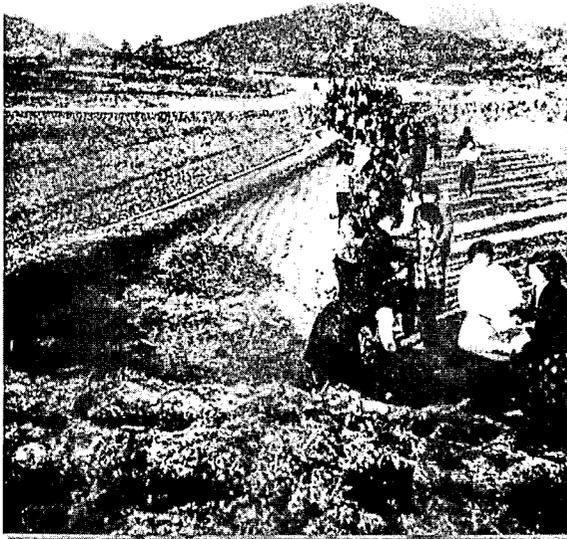
古市の旧校舎は寄宿舎として使用することにして、学校は五月の可部町からの完全校舎引渡しを待って、武田学園も完全引越しをしたのである。さっそく、笹木医院から校医の申し出をいただき、有り難く感謝した。しかし、舎生が古市にいたので、古市時代の富士田校医をすぐ引いてもらうわけにいかぬので、一年後に笹木先生に校医を依頼して、現在もなおこの笹木先生に続けてやっていただいている。

笹木先生には、ただ校医というだけでなく、舎生の発病など随分と御心配していただき、御苦労をかけていることに対し、申し訳なく思っている。

**運動場の
整地** 校地の一部に埋立てをせねばならぬ所があるので、勤労愛・母校愛の精神を培う意味

と、一面経費節約というわけで、毎日放課後に生徒・職員で太田川の河原の砂を運んだ。器具も十分ないので、ある者は風呂敷に入れて運んだりしていた。そのころ、中村の米屋さんの方から三輪車で運ぶのを加勢してやるというて運んでいただいたことなど、忘れられぬ御恩の一つである。

こうして金をかけず、自分たちの力でご親切な中村さんのご好意で、七百坪ばかりの運動場が出来上がった。その周囲に垣根をめぐらしたところ、がちりとして学校らしくなって非常に嬉しかった。そこまでに至ったのは、移って満二年たつてのことである。



運動場作りに風呂敷大作戦 1955年

運動会

可部町での一年目の運動会は、校舎と校舎に挟まれた（帯みたいな）

細長い運動場で行ったのであるが、三年目からは、当時としては広い立派な正方形の運動場で、入場門も退場門も作って大々的に父兄へも案内して行ったのである。生徒も先生も、自分たちの力によって整理したグラウンドで運動会をするので、その喜びは一入^{ワッショ}であった。

運動会には、本校創立以来やってきたワンド体操がつきもので、この体操は見た目も美しく、そのうえ運動の意義の十分含まれた体操なので、運動会等には適切な体操であるので、古市時代も古市小学校の運動会にも参加してこの体操をして好評を博していた。

古市時代は三百坪のグラウンドであったのだが、それでも毎年欠かさず運動会は行っていた。もとより体操台も何も無いので、ミシンの入っていた木の箱を伏せて、それを体操台としてやっていたこともある。近所の子供たちがそれを見て笑っていた。私はその当時も病気で臥せていたのだが、そうした行事のあるときはコルセットを掛けて入場・開会式には出るようにしていた。その感激は一入^{ワッショ}であった。誠に小規模であったが、あの時代が本当に懐かしく、希望の多い毎日であったと思う。なおまた、やりがいを感じていたころでもあった。

可部に帰ったころの私の感想

グラウンド整備後の夏の夜、ギブスベットのから出てコルセットを掛けて、腰をかかえてグラウンドをそろりそろりと歩いて空



中原校舎校庭での体操演技 1957年

の月を眺め、またその運動場を見廻して、”ああ、有り難い。こんな立派な運動場も出来、広い大きな校舎も求められて、先生たちも私の教育方針に沿ってぴしぴしとよく指導して下さい。また生徒も素直に校則を守って、社会から喜ばれる人間になってくれつつある。有り難い嬉しいことである。自分は本当に幸せである。”神に仏に對し、澄み切った夏の月の夜空を見上げ合掌し、涙ながらにこの上もなく感謝した晩もあつた。また或る晩は、平屋の校舎二棟が二列に並んでいたその校舎の廊下の端に立つて、向こうの端までの廊下の長さを眺め、喜びに浸つたこともある。

また自分は今から考えると、あのころがとても懐かしい。小さな夢に希望と喜びを抱いていたところが、一番幸せであつたのだ。これは二十九年、三十年、三十一年ころである。

私は、人間は常に止まることなく前進しなければならぬと考へている。知識に於て、識見に於て、また自分の仕事に於てである。歩幅は狭くても、歩数は少なくとも、進むことである。退歩であつてはいかぬ。徳川家康公の教訓に”人間の一生は重荷を背負つて遠き道を行くが如し、急ぐべからず、不自由を常と思えば不足なし”というのがあつたが、この教えに従つて私の一生も過ごして行くつもりで、急がずに遠い彼方に希望と夢を抱いてぼつぼつと進んできた。またこれからも進んで行くと思ふ。

その意味からも、創立期からの夢であつた”名実共に兼備した教育機関の設置”に取りかかつたのである。

女子専門学校は実力養成主義で、これももちろん必要である。某県立高校の校長先生の言に、「武田学園は高校教育の盲点をついた教育をしている。」とおっしゃつたということを風のたよりで聞いたことがあるが、別に意識して盲点をついた教育をしているのではなかつたのだが、要は心を育てる教育（人づくり）、知識技能の断片的な教育でなく教育が生活に結びつく教育、女性の性能の伸長教育によつて、実力ある、役に立つ、間に合う人間の育成に力を入れているのである。